

『飯川町の大ケアキ②』

この大ケアキに、今一つの話がある。

この大木は、地上から約一丈ほどのところで、二又に分かれ、ふた抱えほどもある大石がのっかいているという。弁慶が義経と奥州へ落ちのびる際、ここを通り合わせ、その時、載せたものといわれている。



「天狗の話を村人から聞いた弁慶が、一夜、天狗と膝を交えて懇談した。そして、主君の義経への追っ手が来たら、石を投げ落として欲しいと天狗と約束し、そこへ石を載せた。その後、天狗が、しっかり、この石を持って見張っていたため、追っ手は、恐れをなして通らなかった。また、悪者たちも、この村だけは寄りつかなかった。村の人たちは、天狗のおかげで末長く平和に暮らすことができたそう。めでたし、めでたし…。」

一説には、滝尾村井田の力持ちが、ケアキの上へ「バン持ち石」を放り上げたと伝えられ、これが本当だといわれている。

現在、この大ケアキの住人は、「むささび」である。それも、数匹数えられる。大ケアキから神社の境内のさるすべり、松の木、もう一本のケアキへと自由自在に飛びまわっている。夏の夜な、夜な、飛びまわる姿は、まさしく「グライダー」のごとくである。

(飯川町 伝承)